



TITLE:

マレーシア、シンガポールの結成 とマレー・ムスリム -- 「カラム」 がみた脱植民地化

AUTHOR(S):

坪井, 祐司

CITATION:

坪井, 祐司. マレーシア、シンガポールの結成とマレー・ムスリム -- 「カラム」がみた脱植民地化. CIRAS discussion paper No.68: 「カラム」の時代 VIII--マレー・ムスリムの越境するネットワーク 2017, 68: 17-26

ISSUE DATE:

2017-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228849>

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

マレーシア、シンガポールの結成と マレー・ムスリム

『カラム』がみた脱植民地化

坪井 祐司

はじめに

本論は、1960年代のマレーシア、シンガポールという国民国家の形成に関する『カラム』の記事の分析を通じて、同誌に集ったシンガポールのマレー・ムスリム知識人の視角を明らかにし、その言説を同時代の社会的文脈に位置づけることを試みる。

マレーシア、シンガポールという現在の国家の枠組みが定まったのは、1960年代の脱植民地化の最終局面においてであった。1957年に独立したマラヤ連邦とイギリス統治下にあったシンガポール、サラワク、北ボルネオ(サバ)は、1963年にマレーシアを結成し、そこからシンガポールが1965年に分離独立した。この政治過程は近隣諸国をも巻き込んで展開された。インドネシアのスカルノ政権はマレーシアに「対決政策」を打ち出し、フィリピンからはマラヤ、フィリピン、インドネシアの協調体制である「マフィリンド」構想が出されるなど、さまざまな外交や議論が展開された。

この政治過程をめぐるのは、多くの先行研究がある。近年イギリス、アメリカなどの未公開の公文書の公開が進んだ結果、公刊資料をもとに構成されていた歴史叙述が修正を迫られる部分も出てきている。ただし、そうした研究の多くは、外交資料や政治家の記録

から国際政治の文脈の中で分析されたものである。こうした研究の進展を踏まえて、現地の社会的文脈、すなわちこれらの政治過程がどのようにとらえられていたかという点も再検討する必要が出てきているといえよう。マラヤ・マレーシアの政治に対して積極的に発言していた『カラム』は、同時代の特定の国家に同化されない在野のマレー・ムスリム知識人の視角を明らかにする言説として重要な意味を持っている。

『カラム』は、マレーシア構想の発表から形成、シンガポール分離に至る政治過程について、社説、記事で折に触れてとりあげている。くわえて、主筆エドルスがチュムティ・アルファルーク(Cemeti Al-Farouk)という筆名で毎号書いていたコラム「苦いコーヒー(Kopi Pahit)」、一カ月の間に起こった出来事を記した時事的コラム「行く月くる月(Dari Sebulan ke Sebulan)」でもしばしばマレーシア情勢をとりあげている。筆者は、これまで主に1950年代の『カラム』のマラヤ政治関連の記事の分析を通じて、同誌がイスラム主義に基づいてマレー民族主義政党のUMNO(統一マレー国民組織)を批判したことを明らかにしてきた[坪井2013, 2014a]。本論は、60年代の記事まで視野を広げ、その変化を分析するものでもある。本論にて参照した『カラム』記事は表のとおりである。

本論の構成は以下の通りである。第一節では、先行

表 本稿で参照した『カラム』の記事

	号	年	月	頁	タイトル(著者)
1	131	1961	6	5	行く月くる月
2	132	1961	7	7	行く月くる月(アブドゥッラー・バスメ)
3	133	1961	8	2	苦いコーヒー
4	133	1961	8	39	行く月くる月(アブドゥッラー・バスメ)
5	134	1961	9	23	厳選ニュース:シンガポールの合併
6	137	1961	12	3	社説:ムラユ・ラヤの成功
7	146	1962	9	24	ムラユ・ラヤ:ムラユ・ラヤ連邦条約が無事完成
8	150	1963	1	17	ブルネイの反乱:アザハリがブルネイで流血の歴史を刻む(カラムの評論家)
9	151	1963	2	-1	苦いコーヒー
10	152	1963	3	19	行く月くる月
11	153	1963	4	2	苦いコーヒー
12	154	1963	5	3	社説:スカルノとその行動
13	154	1963	5	29	行く月くる月

表 本稿で参照した『カラム』の記事 (続き)

号	年	月	頁	タイトル
14	155	1963	6	31 行く月くる月
15	156	1963	7	23 行く月くる月
16	158	1963	9	2 苦いコーヒー
17	158	1963	9	3 社説:スカルノ政権とマレーシア
18	158	1963	9	11 行く月くる月
19	159	1963	10	2 苦いコーヒー
20	159	1963	10	3 社説:我慢しなければいけないこと
21	159	1963	10	12 インドネシアは我々に何と言っているか
22	160	1963	11	2 苦いコーヒー
23	160	1963	11	8 社説:インドネシアへのマレーシアの声
24	163	1964	2	2 苦いコーヒー
25	163	1964	2	4 社説:インドネシアの対決政策
26	164/165	1964	3/4	2 苦いコーヒー
27	168	1964	7	2 苦いコーヒー
28	169	1964	8	3 社説:望ましくない事件
29	169	1964	8	17 行く月くる月
30	171/172	1964	10/11	20 行く月くる月
31	173	1964	12	4 社説:インドネシアのプロパガンダに対して
32	173	1964	12	18 行く月くる月
33	174	1965	1	19 行く月くる月
34	177	1965	4	39 苦いコーヒー
35	178/179	1965	4/5	2 苦いコーヒー
36	178/179	1965	4/5	10 行く月くる月
37	181	1965	8	15 行く月くる月
38	182	1965	9	3 社説:少数派の権利
39	182	1965	9	7 マレーシアからのシンガポール分離に関する影響と意見:驚愕の分離
40	193	1966	8	25 祖国の政治評論:シンガポールの状況とマレーシア・インドネシアの対決政策終結への努力(我々の特別評論家)
41	194	1966	9	22 マレーシアとインドネシアの和平に関する四つの基本的な重要事項

研究にもとづき1960年代のマレーシアをめぐる政治史を概観し、さまざまな国家や民族の枠組みに関する構想を整理する。第二節では、マレーシア結成をめぐる『カラム』の論説を紹介し、左派・批判派の『カラム』がマレーシアを積極的に賛成したこととその理由を明らかにする。第三節では、シンガポール分離をめぐる『カラム』の論説を整理し、第四節では同誌が言及した「マフィリンド」概念に着目してその世界観を分析する。結論として、シンガポールのムスリム知識人が国民国家の枠組みが固まっていく過程でなお広域的な統合を訴え、様々な形でムスリムの連帯を模索していたことを明らかにする。

1. マレーシア、シンガポールをめぐる政治過程

マレーシアは、旧英領植民地であったマレー半島のマラヤ連邦、シンガポール、ボルネオ島のサラワク、北ボルネオの統合によって形成された。マレーシア結成を提唱したのは、マラヤ連邦首相のアブドゥルラーマン(以下ラーマン)であった。1961年5月、ラーマンはすでに独立していたマラヤ連邦にイギリス植民地の

シンガポール、ボルネオのブルネイ、サラワク、北ボルネオを加えた連邦国家の構想を発表したのである¹⁾。

マラヤ連邦以外の各地域では反対意見も見られたが、ラーマンと各地域の指導者との間で個別に交渉が行われた。シンガポールでは、左派は反対したものの、自治領下で首相だった人民行動党(PAP)のリー・クアンユーはマレーシア加入を支持し、1962年9月の住民投票を経て加入を決めた。マラヤとの行政・経済的な関係が強くなかったボルネオ三邦では反対意見も根強かった。ブルネイでは、62年12月にマレーシア参加に反対する左派系のブルネイ人民党による反乱事件がおきた。反乱は失敗に終わったが、結局ブルネイのスルタンはマレーシア加入を見送った²⁾。一方、北ボルネオ、サラワクについては、マラヤ連邦にイギリスも含めた政府間委員会が設置され、一定の自治権の保証

1) ただし、近年の研究では、マレーシア構想はラーマン一人のものではなく、イギリスが積極的に関与しており、脱植民地化は大英帝国による秩序再編の一部でもあったことも明らかにされている[鈴木 1996, Jones 2002]。

2) ブルネイの不参加の原因はスルタンの序列と石油収入の分配をめぐる問題であったとされるが、鈴木はスルタンがマラヤ連邦との合併よりもイギリスとの協力により自らの地位を維持することを選択した結果であると指摘している[鈴木 2015]。

のもとでマレーシアへの加入が合意された。両地域ではマレーシア賛成派の政治勢力が結成され、地方選挙で勝利することで加入が確定した³⁾。マレーシア協定は、63年7月9日にイギリス、マラヤ連邦、シンガポール、サラワク、北ボルネオによって調印された。

しかし、ボルネオ三邦のマレーシア加入は、隣接するフィリピン、インドネシアの反対を招き、国際問題となった。フィリピンは、北ボルネオの領有権を主張していた。さらに、インドネシアのスカルノ政権は、同国を取り巻くイギリス植民地の統合により形成されるかたちとなるマレーシア構想をイギリスの新植民地主義の産物であるとして強硬に反対した。スカルノはブルネイの反乱後には「対決政策 (Konfrontasi)」を表明し、マレーシア打倒を公言した⁴⁾。

そうしたなか、フィリピン大統領マカパガルが提唱したのが、マラヤ連邦、フィリピン、インドネシアの三国による紛争解決の枠組みとしての「マフィリンド」であった。フィリピンは対立するマラヤ連邦とインドネシアを仲介する形で、1963年7～8月に三国の首脳会談をマニラで開催した。会議では、協調の象徴としてマフィリンドが打ち出され、ボルネオの帰属問題に関して国際連合による住民の意向の調査を求めた。

8月に調査団が派遣されるなか、ラーマンはマレーシア結成の準備を進めた。サラワク、北ボルネオの住民はマレーシア加入を望んでいるという調査団の結論をうけて、マレーシアは1963年9月に正式に発足した。これを不服としたフィリピン、インドネシアはマレーシアとの国交を断絶し、マフィリンドの協力体制は崩壊した。インドネシアのスカルノ政権はサラワクとの国境地域に軍隊を動員し、両国は戦争寸前となった。インドネシアは1965年1月にはこの問題で国連から脱退する。

一方のマレー半島では、1963年9月のシンガポールの選挙でリー・クアンユー率いるPAPが勝利し、64年4月のマレーシアの選挙では連盟党が勝利した。しかし、両者は次第に対立を深めていき、シンガポールでは64年7月、9月に続けて華人とマレー人の間の民族間暴動が起こった。最終的に、シンガポールは65年8

月にマレーシアを離脱した⁵⁾。ここに、現在のマレーシア、シンガポールという国家の枠組みが確定した。

マレーシアとインドネシア・フィリピンとの関係は、政権の交代により改善に向かった。1965年の9.30事件を契機にスカルノが権力を奪われると、66年8月にインドネシアとの和平協定が調印された。フィリピンはマルコス政権樹立後の66年6月にマレーシアを承認した。これにより、一連のマレーシア形成をめぐる政治過程は終息したのである。

2. 『カラム』からみたマレーシア結成

2.1. マレーシア構想の発表と受容

1961年5月にラーマンが発表したマレーシア構想を『カラム』が初めて言及したのは、1961年6月号のコラム「行く月くる月」においてであった。そのなかでは、この構想は「ムラユ・ラヤ (Melayu Raya、大マレー)」と表現されており、これが「マレーシア」という語に置き換わるのは61年12月である。

「ムラユ・ラヤ」とはマレー民族の統合を意味し、第二次大戦前に主に急進派の民族主義者により提唱された英領マラヤ・ボルネオと蘭領インドネシアの統合構想を指して使用された語であった [Roff 1994: 232–233, Rustam 2008]。一方で、「マレーシア」も戦前から英語として使用されており、マレー諸島 (範囲としてはムラユ・ラヤとほぼ重なる) をあらわす概念であった。これらの概念とラーマンが打ち出したマレーシア (マレー半島、ボルネオ島の英領植民地の統合) は必ずしも同じ概念ではなかった。「マレーシア」という語の多義性は、この地域における民族や社会の重層性を示している。脱植民地化の過程のなかで、国民国家の枠組みをめぐる、さまざまな構想、議論が交錯したのである。

『カラム』は、マレーシア構想に基本的に賛成の立場であった。最初に言及した「行く月くる月」では、構想は「すべてのマラヤ連邦の政治家に受け入れられた」と書いている [Qalam 1961.6: 7]。翌月の「行く月くる月」では、他地域の好意的な反応を紹介した。シンガポールでは、首相リー・クアンユーが受け入れを表明した。ボルネオ三邦のイギリス人行政官や各地の政治指導者は、まず三邦の統合を優先したいとしながら

3) マレーシア結成にあたってのボルネオ諸邦の政治過程については [Ongkili 1985]、とくに北ボルネオについては [山本 2006] を参照。

4) 対決政策も、マラヤ連邦とインドネシアの関係だけではなく、イギリス、アメリカを含めた国際関係のなかで形成されたものであることが明らかにされている [Poulgrain 1998, Nik Anuar 2000, Jones 2002]

5) この経緯についても、従来はマレーシアがシンガポールを追放したというのが定説であったが、シンガポールの側の主体性を強調する研究もある [Lau 1998]。

も、ムラユ・ラヤ構想を歓迎していると報じた[*Qalam* 1961.7: 7]。

同コラムでは、以下のように続けている。「トゥンクが主唱したムラユ・ラヤ構想は望ましい基礎や土台となる。将来はそこから半島とインドネシア、フィリピンを含むマレー諸島全域を統合し、真実や歴史にもとづいた本当のムラユ・ラヤ連邦国家ができるだろう」[*Qalam* 1961.7: 7]。『カラム』は、マラヤ連邦がマレーの国々や諸地域を統合した国家としてムラユ・ラヤをとらえていた[*Qalam* 1961.9: 23]。ボルネオ諸邦は、マレーの地域(Wilayah Melayu)とみなされていたのである。彼らの理想はマレー民族の団結・統合であり、インドネシア、フィリピンまで含めた(マレー・ポリネシア語族としての広義の)マレー民族を核とする広域の統合への一歩として肯定的に評価していた。

ただし、シンガポールは華人が多数を占め、サラワク、北ボルネオの現地人の多数は(『カラム』からみれば)広義のマレー民族ではあったが、半島のマレー人とは文化的に異なっており、非ムスリムも少なくなかった。フィリピンに関してはキリスト教徒が多数派である。ムラユ・ラヤは、統合を広域にすればするほど民族的な多様性が高まるというジレンマを抱えていた。『カラム』では、この点については触れられていない。ただし、主筆エドルスは、61年8月号の連載コラム「苦いコーヒー」のなかで、マレーシア構想を素晴らしいと評価し、100%賛成と書く一方で、「民族の名前は何なのかを知りたい人はいるだろう」とも記している[*Qalam* 1961.8: 2]。新たに形成される国家は多民族であり、そのネーションの「名前」は大きな論点とみなされたのである。

2.2. 『カラム』とマレー人左派

実際には、マレーシア構想はすべての勢力に好意的に受け入れられたわけではなかった。マラヤ連邦において、野党を構成した左派勢力はマレーシア構想に反対した。左派は、植民地の境界を越えてインドネシアとの統合による旧来のムラユ・ラヤの形成を志向しており、インドネシアぬきの英領植民地の統合にすぎないラーマンのマレーシアはかえってその障害になるとみなされた[Sopiee 1974: 169-172]。マラヤ連邦におけるイスラム勢力である全マラヤ・イスラム党(PAS)もまた同様の立場をとった。『カラム』も政治的立場はPASと近く、ラーマン率いるマレー民族主義政党であるUMNOや華人、インド人の民族政党が集まっ

た与党体制(連盟党)とは論戦と繰り返してきたが⁶⁾、同誌はマレーシアに賛成した。両者のマレーシアをめぐる態度の違いはどこに起因するのであろうか。

1961年12月号の社説「ムラユ・ラヤの成功」には、『カラム』の視角からマレーシアに賛成する理由が二点明示されている。その一つは、植民地のシンガポールが早期に独立を達成する手段と考えられたためである。ムラユ・ラヤの構成員として、「新たな連邦国家において同等の権利を得る」ことが可能と考えられた。二つ目は、共産主義への対抗のためである。宗教を否定する共産主義勢力は、『カラム』にとって大敵であった。華人が大多数を占め、左派の政治勢力が力を持っていたシンガポールにあって、『カラム』は共産主義の脅威を強調した。連邦への加入は、「わが愛する祖国の安寧と平和を破壊する共産党の伸張の危険への防波堤となる」と考えたのである。一方で、左派勢力は、「ムラユ・ラヤ国家ができたならシンガポールや他のマレー地域を共産主義国家にしようとする彼らの願いが水泡に帰すと認識し、ムラユ・ラヤ構想のとん挫のために活動している」と主張した[*Qalam* 1961.12: 3]⁷⁾。独立の達成と共産主義への対抗を重視してマレーシア構想に賛成した『カラム』の論説には、シンガポールのマレー・ムスリムという立場が反映されている。

この結果、マラヤ連邦のPASとは立場を異にすることとなった。先の社説では、華人が多数を占めるシンガポールとの合併によってマレー・ムスリムの比率が低下することを懸念するPASに対して、「連邦議会におけるシンガポールの議席数が制限されていること、シンガポールとともにムラユ・ラヤ連邦に合併するボルネオにおけるマレー人と原住民の数を考えると、PASが心配する理由はなく、長く切望されてきたムラユ・ラヤ連邦を拒否する余地もない」と論じた[*Qalam* 1961.12: 3]。

1963年3月の「行く月くる月」では、PAS副総裁ズルキフリ・ムハンマド(Zulkifli Muhammad)⁸⁾の声明を批判した。インドネシアとの統合を優先するPAS

6) とくに主筆エドルスは、イスラム教の主張を十分に代表していないという理由でUMNOに批判的であった。1950年代における『カラム』のUMNOとの論争については、筆者の前稿を参照[坪井 2013, 2014b]。

7) 61年8月の「行く月くる月」では、リー・クアンユーの発言を引用する形で、共産主義者は、ムラユ・ラヤ構想を「連邦の封建勢力」やシンガポールの「無定見なブルジョワ」と共謀したシンガポールのイギリスの陰謀とみなし、「ムラユ・ラヤ」構想を破壊する決定を下していると批判した[*Qalam* 1961.8: 40]。

8) ズルキフリ・ムハンマドは、1950年代はたびたび『カラム』に寄稿しており、もともととは関係が良好な人物であった。

は、マレーシア結成にはインドネシアの同意が必要と主張した。対してコラムは、マレーシアはかつてのイギリス領植民地のなかで最初に独立したマラヤ連邦が以前から関係を持っていた他の諸邦を統合して独立国を作るものであると正当化した。そして、インドネシアがマレーシアを「新植民地主義」と批判するならば、スカルノの西イリアンの「併合」も新植民地ではないかと反論した。そして、スカルノの狙いは国民の関心を海外にそらし、ボルネオ北部を植民地化することだとして、PASはスカルノの野望を認識すべきだと論じたのである[*Qalam* 1963.3: 19]。この点から、PASなどマラヤ連邦のイスラム勢力と『カラム』の大きな違いはインドネシアへのスタンスであったといえる。

2. 3. ボルネオ問題

マレーシア構想をめぐって、マラヤとインドネシアは全面的に対立した。対立点の一つが英領ボルネオ(サラワク、ブルネイ、サバ)の帰属問題である。ボルネオに焦点が当たる一つの契機は、1962年12月にブルネイで起こった反乱であった。マレーシアに反対するブルネイ人民党の軍事部門「北カリマンタン国民軍」が武装蜂起し、スカルノは支持を表明した。反乱はイギリス軍により鎮圧されたが、指導者アザハリはインドネシアに逃れた。翌1963年からインドネシアのマレーシアへの「対決政策」を表明することになる。

『カラム』は1963年1月号でこの件について詳しく報じている(「ブルネイの反乱:アザハリがブルネイで流血の歴史を刻む」)。記事では、「植民地であれ新植民地であれ、植民地からの解放を目指す反乱を支援すると述べた」として、スカルノを非難した。そして、反乱の背景には明らかに外部分子の存在があると主張した。ブルネイが石油資源を持ち、豊かな国であることを考えれば、反乱が貧困から起こったと推定しがたい。さらに、人民党は前年の選挙で大勝しており、ブルネイの権力掌握だけならば武力に訴える必要もなかった。「外部分子」は民衆の目を欺き、サバ・サラワクを含めた地域も支配下におさめるという政治的目的のために流血の事態を引き起こしたと主張したのである[*Qalam* 1963.1: 17]。

インドネシアが英領ボルネオを「植民地化」しようとしているというのが『カラム』の一貫した主張であった。エドルスは、「苦いコーヒー」(1963年2月)において、この行動がスカルノのボルネオ、そして東南アジア支配の第一歩であるとした[*Qalam* 1963.2: -1]。

先に紹介した63年1月号の記事でも、インドネシアは西イリアン獲得に成功した後、ポルトガル領ティモールと北ボルネオの占領を準備していたと主張した。相手国に親インドネシア勢力を作り、国内からインドネシアへの統合を要求させ、そのうえで強硬な武力行使にでるのが常套手段であると指摘した。インドネシアの援助で反乱が成功し、もし北ボルネオ「政府」ができていれば、その政府はインドネシアに頼ることになる。インドネシアもまたマラヤ・ボルネオを統合したインドネシア・ラヤを目指しており、ブルネイへの支援はその一環だというのである[*Qalam* 1963.1: 17]。

ブルネイの反乱は対決政策に直結した。インドネシアはサラワクとの国境付近でゲリラ戦を支援し、一触即発の状況となった。63年5月の「行く月くる月」では、インドネシアとの国境に近いサラワクで武装集団の攻撃があったことに触れている。これが「インドネシア人でないにせよ、インドネシアに守られ、武器を与えられたアザハリの手のものであると理解される」として、「この疑いが正しければ、軍事侵略が始まったに違いない」と主張した[*Qalam* 1963.5: 29]。この時期から、マレーシア構想はボルネオをめぐる国際問題へと転化していったのである。

2. 4. インドネシアの「対決政策」

マレーシア構想はインドネシアのスカルノ政権のマラヤ連邦に対する「対決政策」を招いたが、『カラム』はそれ以前からインドネシアのスカルノ政権とは対立関係にあった⁹⁾。このため、63年以降のマレーシアに関する『カラム』の記事では、スカルノ政権に徹底的に「対決」していくのである。

スカルノは、イスラム国家を否定しただけではなく、1960年に『カラム』が支持していたイスラム政党であるマシュミ党を非合法化した。くわえて、60年代になるとスカルノ政権の中国および共産党への接近が顕著になる。このことは、『カラム』のスカルノへの批判をさらに増幅させた。

1963年5月号の社説「スカルノとその態度」では、スカルノがマニラでの三カ国首脳会議開催に同意したにもかかわらず、武力行使で威嚇しながらマレーシアに強く反対し続けていると批判した。そして、スカル

9)『カラム』は、1950年の創刊当初はインドネシアを独立に導いたスカルノを称賛していた。しかし、スカルノが「イスラム国家」を否定したという理由で、1952、3年頃から一転して批判するようになり、その後は一貫してスカルノ政権には全面否定の立場をとった[坪井 2014a, 2015]。

ノがインドネシア国内において他の指導者を投獄するなど独裁体制を固める一方で、国民の関心を国外に向けようとして軍事的な手段に訴えていると主張した。さらに、ソ連、中国といった共産主義諸国に接近していると非難した[*Qalam* 1963.5: 3]。64年2月の社説「インドネシアの対決政策」では、「インドネシア政府は今や共産主義者の巢窟で、イスラムを弾圧している」と糾弾した[*Qalam* 1964.2: 4]。インドネシアがマレーシア問題により国連を脱退した65年1月の「行く月くる月」では、スカルノがこの処置をとったとき、中国共産党の将軍がインドネシアを訪れ、インドネシア高官と長時間協議していたと報じた。ここから、スカルノが中国共産党よりの行動をとるインドネシア共産党党首のアイディド(Aidid)の命令に従っていることは明らかであると主張した[*Qalam* 1965.1: 19]。

マレーシアが結成される63年9月前後になると、社説で反インドネシアの記事がたびたびだされるようになる。その多くはすでに紹介した言説の繰り返しであり、ボルネオ問題が頻繁に取りあげられた。9月号の社説「スカルノ政権とマレーシア」は、スカルノがボルネオを植民地化しようとしていると訴え、ラーマンに軟弱な対応を取らないよう警告する内容であった[*Qalam* 1963.9: 3]。

翌10月号の社説「何を耐え忍ぶのか」では、ボルネオに軍隊を集中したスカルノ政権を非難するとともに、スカルノが使用した「新植民地主義」という語をとりあげて、ジャワ人がインドネシアを植民地化していると論じた。「本当はインドネシアによる新植民地主義ではないのか？」と問うたのである。西スマトラのイスラム勢力の反乱のあと、官僚はすべてジャワ人になってしまったとして、「すべての地域の富はジャワを潤し、地方の民は奴隷となる」と主張した[*Qalam* 1963.10: 3]。

『カラム』がたびたび強調したのは、スカルノ政権がイスラムを抑圧しているという点であった。63年11月号の社説「インドネシアへのマレーシアの声」では、マレーシアのラジオ放送のスカルノ政権批判について、スカルノのイスラム教への迫害がほとんど触れられていないことに不満を示した。1955年の総選挙でジャワ島以外ではマシュミなどのイスラム政党が勝利したことを指摘し、マシュミが非合法化されてもマシュミ党員は健在であり、ムスリムは行動する用意があると主張した[*Qalam* 1963.11: 8]。

そして、64年1月号の社説「報復攻撃」では、サラワ

クのゲリラ活動を支援したインドネシアへの報復として、インドネシアの反スカルノのイスラム勢力の武装闘争を援助することを提唱した。スラウエシ、南カリマンタン、西ジャワ、アチェなどの具体的な地域を挙げて、スカルノの手からインドネシア解放するための組織を作ることを主張したのである[*Qalam* 1964.1: 3]。

64年12月の社説「インドネシアのプロパガンダに対して」でも、ムスリムの連帯を通じたスカルノ政権打倒を訴えた。記事は、インドネシアとマレー半島ではイスラムを通じて同胞意識がはぐくまれ、二つの民族の間には現在まで深い愛情が生まれていると論じた。インドネシアはマレー半島の人々の信仰心が強いことを知っているため、ラジオ・インドネシアは宗教をプロパガンダに使っている。このため、対抗手段として、インドネシアのイスラム革命精神を惹起し、イスラムを弾圧するスカルノ政権打倒の機運を盛り上げるべきと主張したのである[*Qalam* 1964.12: 4]¹⁰⁾。

1963年のマレーシア成立前後の『カラム』の報道は、むしろインドネシアのスカルノ政権批判となっていた。『カラム』は、インドネシアを含めたマレー民族の大同団結の一步としてマレーシアを支持したが、彼らの理想の実現の障害となっているのがスカルノ政権であり、政権打倒のためにインドネシアのイスラム勢力との連携を訴えた。マレー民族の統合を支持しながらインドネシア(スカルノ政権)を敵視したことは、同誌のスタンスが民族主義ではなくイスラムを基盤とした統合であったことを示している。

3. シンガポールの分離と『カラム』

1963年に成立したマレーシアだが、1965年8月にはシンガポールの分離独立という激震に見舞われた。シンガポールを本拠とする『カラム』は、どのような視点でこれをとらえたのだろうか。

『カラム』はシンガポール・マレーシアの対立を華人・マレー人間の民族問題としてとらえ、マレー人の立場から華人およびシンガポール首席大臣リー・クアンユーを一貫して批判した。64年7月の「苦いコーヒー」では、「シンガポールのマレー人がふさわしい扱いを

10) このほかにも、64年3/4月号の「苦いコーヒー」において、エドルスはスカルノはなぜ米軍基地を置くフィリピンに「対決政策」をとらないのかと皮肉った[*Qalam* 1964.3/4: 2]。アメリカとイギリスでは違いはないのに、マレーシアとフィリピンでは対応が違っていると主張したのである。

要求したら、民族問題をあおったと批判された」と不満を述べた。植民地時代はなにか要求したら民族問題をあおったと批判され、独立した今もなお同じように批判されるというのである。そして、シンガポールのマレー人が自身のことを管理したいとただで民族問題となるのは、民族をあおるインドネシアからのプロパガンダの影響であると主張した[*Qalam* 1964.7: 2]。

マレーシア結成からシンガポール分離までの大きな事件として、1964年7月のシンガポールにおける華人・マレー人の民族衝突事件がある。これは、ムハンマド生誕祭におけるムスリムの行進をきっかけとしておこった。これについて扱った64年8月の社説「望ましくない事件」では、華人が攻撃の標的となったのはリー・クアンユーの責任であると断じた。新聞、ラジオ、テレビで流れた発言を精査すれば、リーが華人・マレー人の両者をたきつけて火遊びをしているとわかる。最大のマレー人勢力UMNOは常に華人と協働しており、華人と敵対するつもりはないと言明したにもかかわらず、リーはこれに耳を傾けない。政府の責任ある人物にふさわしくないやり方をとっているというのである[*Qalam* 1964.8: 3]。同じ64年8月号の「行く月くる月」でもこの件に関してリー・クアンユーが非合理的な意見の声明を出したと批判している。リー・クアンユーは、暴動が特定の集団により組織されたと批判した。このような空気の中で批判することは、感情を冷静・平静化するどころか沸騰させかねないといふのである[*Qalam* 1964.8: 17]。

64年10/11月号の「行く月くる月」では、リー・クアンユーが共産主義的であると非難した。これは、1955年のリーの発言をとらえたものであった。元記事は、リーの『デイリーミラー』への寄稿が『ストレート・タイムズ』に転載され、それがマレー語紙『ミングアン・ブリア(Mingguan Belia)』に転載されたものであった。そこでは、リーはマラヤでは「共産党は必ず勝利する」と言明していた。自身が共産主義者であることは否定したが、「華語ができるシンガポール人は共産主義に反対しない」とも述べた。さらに、「植民地と共産主義の二者択一が与えられたら共産主義を選ぶ」、「もしマラヤが将来独立したら、マラヤは華人の国となる」という発言も引用されている[*Qalam* 1964.10/11: 20]。65年5月の同コラムでは、「マレーシアは共産主義でも反共でもない」というリーが発言したことをとりあげ、国家の外交政策に口出しするものと批判した

[*Qalam* 1965.5: 10]。

64年12月の「行く月くる月」では、インドネシアから2名の「関係者」がリー・クアンユーのもとに来て、シンガポールからマレーシアから分離すれば、インドネシアがシンガポールとの経済関係を復活するという条件と申し出たと書いた。親共のスカルノとリーの連携を懸念していたことがわかる。同じコラムでは、リーが南洋大学の設置の許可をマラヤ連邦に要求したことについて、シンガポールの自治が認められた労働問題と教育問題で揺さぶり、マラヤ連邦の国民統合を壊そうとするものと批判した。リーがマレーシアが成功したいなら各民族が母語を使うようにすべきと発言したこと、華語紙が華語をマレーシアの公用語にすべきという意見を載せていることに対して、言語出版局(Dewan Bahasa dan Pustaka)局長が反論したこともとりあげている[*Qalam* 1964.12: 18]。

分離が決定した65年に大きな問題となったのは、リーが主唱した「マレーシア人のマレーシア」というスローガンであった。マレー人政党であるUMNOが主導権を握るマレーシアにおいて、リーはマレー人、華人といった民族を越えた「マレーシア人」という概念を強調したのである。これは、マレーシア構想が発表された当初、エドルスが「民族の名前は何か」と問いかけた問題に通じるものであった。華人の立場からは、マレーシアという国家に帰属する人々はマレーシア人として平等な権利を得るべきととらえられた¹¹⁾。しかし、『カラム』の立場からは、これは受け入れられないものであった。65年4月号の「苦いコーヒー」では、「リー・クアンユーはいつもマレーシアが平安であるためには各民族が団結しなければならないと言っている！しかしリー・クアンユーが強調し、火をつけ、たきつけ続ければ団結は実現しない！」と述べた[*Qalam* 1965.4: 39]。翌5月の「苦いコーヒー」では、「マレーシア人のマレーシア」について、マレーシア加入に同意しても、マレー人の統治に同意したことにはならない、マレー王権を国家の象徴として認めないということだと解説する。このことを「マラヤを愛する者は観察し、注意する必要がある」と警告した[*Qalam* 1965.5: 2]。

ちょうどシンガポールがマレーシアから分離した

11) この地域において、血統主義によりマレー人が優先的な権利を持つのか、出生地主義によりこの地に生まれた人々は対等な権利を持つのかという論点は、英領期から連続するものであった。1920年代以降、現地生まれの華人は「マラヤ人(Malayan)」を名乗り、マレー人と対等な権利を要求した。「マレーシア人」という概念はその延長線上にある。

65年8月の「行く月くる月」もこの問題を取りあげ、「民族性の喪失」と「マレーシア人のためのマレーシア」というスローガンに疑問を投げかけた。多民族社会における文化、生活様式、慣習、宗教の違いを強調し、この状況でマレーシア人のマレーシアは実現可能だろうか?と問うたのである。そして、リーのマレーシア人のマレーシア案は、植民地統治の方法を実践しようとしているに過ぎないと主張した[*Qalam* 1965.8:15]。

こうした状況であっても、シンガポールの分離は驚きをもって迎えられた。65年9月の記事「マレーシアからのシンガポール分離に関する影響と意見：驚愕の分離」では、分離の原因をリー・クアンユーに求めた。「マレーシア結成以降、シンガポール州政府と中央政府の問題は常に解決できず、最近では民族問題が深刻化し、インドネシアによる対決政策に直面しているマレーシアを麻痺させるような流血の時代を招きかねなかった」。リーはそこここで中央政府を悪く言い、そのすべてがインドネシアのマレーシア攻撃の材料となった。これに対して、ラーマンは常に平和的な解決を模索してきたが、ついに断固たる処置をとり、シンガポールとマレーシアの離婚となったという見立てであった[*Qalam* 1965.9:7]¹²⁾。

シンガポールという国家の成立は、『カラム』にとって歓迎されざる事態であった。マレー・ムスリムが少数派となったためである。65年9月号の社説「少数派住民の権利」は、その点を扱っている。シンガポールの首相となったリー・クアンユーは、シンガポールが華人、マレー人、インド人、ユーラシアンではなくシンガポール人により統治されること、少数派住民(マイノリティ)の権利、特にマレー人は憲法前文で記載された特別な権利が優先的に守られると述べたことを紹介した。これに対し、「これを実行することが少数派、特に教育、生活水準、経済など様々な分野で取り残されているマレー人への利益をもたらす」と論じた。そして、「新憲法では議会に少数派も数に応じた代表が任命されることが望ましい」として、代表は政治組織に属さないユーラシアン、インド、マレー人により構成されるべきと主張した[*Qalam* 1965.9:3]。

『カラム』は、マレーシアとシンガポールの対立をマ

レー人対華人の民族問題としてとらえ、シンガポールのマレー人の立場から華人とリー・クアンユーを批判した。一方で、シンガポールの華人からは出生地主義に基づくマレーシア人、シンガポール人という民族概念が主張され、分離により少数派となったマレー・ムスリムは危機感を強めた。

4. 地域の枠組みとマレー・ムスリム——「マフィリンド」をめぐる

このシンガポールの分離の過程で、『カラム』は「マフィリンド」に言及した。マラヤ、フィリピン、インドネシアという三地域の統合構想は、フィリピンのナショナリズム運動の英雄ホセ・リサルによる東南アジア島嶼部全体に分布するマレー・ポリネシア語族全体の統合という構想に端を発していた。ただし、1963年にフィリピン大統領マカパガルにより提唱されたマフィリンドとは、三カ国による紛争解決のための緩やかな連合であり、国家の枠組みを超えた統合を意味するものではなかった[Mackie 1974: 165-167]。そして、マフィリンドは、マレーシア構想に対抗してフィリピンがインドネシアを巻き込んで持ち出したものであり、マレーシアが実現すると議論は下火となった。しかし、『カラム』は65年になってマフィリンドに言及したのである。これはどのような理由があるのだろうか。

先に引用した記事「マレーシアからのシンガポール分離に関する影響と意見：驚愕の分離」(65年9月)では、シンガポールの分離を華人が国民国家を形成した結果ととらえ、「もしシンガポールで多数派住民が国民党・共産党に関わらず華人が統合することを夢見ているならば、そのような夢はマレーの出自の人々にも確かに昔からある」と主張した。ここで登場するのが、マレー民族の統合構想としてのマフィリンドである。マカパガルが提唱したマフィリンドの枠組みは、もしインドネシアの対決政策がなければもっと現実的な構想となっていただろうと主張した。当時マレーシアに属していたリー・クアンユーはこれに危機感を抱き、シンガポールの同意なしに「マフィリンド」はありえないと主張した。そして、華人はマレー人のもとにおかれたくないというPAPのキャンペーンを引き起こす原因となった。シンガポールの住民の80%は華人であることは周知の事実であるにもかかわらず、リーがこの国が華人、マレー人、インド人、ユーラシアンではなく、シンガポール人により統治されると強調することにもなった。『カラム』によれば、シンガポールのマ

12) 『カラム』は、シンガポールにとって、独立は重荷だととらえていた。軍隊や外交などを維持する予算は大きくなる一方、産業は原料を輸入に依存せざるを得ない。工業は、香港、中国、日本、韓国など競争相手も多く、かつては一番の市場であったインドネシアは対決政策のために関係が断たれた。一方のマラヤは、森林、鉱物、ゴムなど、工業化のための資源を持っており、経済的にも有利な立場にあるとみなされた[*Qalam* 1965.9:7]。

レーシア加入から分離に至る政治過程は、華人の団結とマレー諸島人の統合という二つの集団の構想の対立であった。後者は、突き詰めればマフィリンドに向かうことになる。この見方にもとづけば、シンガポール独立はマフィリンドの復活につながる。ラーマンがマフィリンドに慎重だったのは、PAP政府の強硬な反対によりマレーシアの崩壊につながりかねなかったからである。マフィリンドに反対した華人主体のシンガポールが独立したことで、議論が順調に進むと考えられた[*Qalam* 1965.9: 7]。

ほぼ同時期、インドネシアでは9.30事件が起こり、スカルノからスハルトへの権力移譲が起こる。『カラム』は、対決政策を主導したスカルノの失脚とともに、マフィリンドの復活とインドネシア・マレーシア関係の改善を期待した。66年8月の記事「シンガポールの状況とマレーシア・インドネシアの対決政策終結への努力」では、対決政策の終了に向けた課題として「マフィリンド」とマレーシアにおけるイギリス軍基地の問題を挙げた。前者については、かつてマフィリンドに反対したのは華人であり、「マレー諸島の諸国の人々の声と利益を統合するためマフィリンドが浮上した」ことを強調した[*Qalam* 1966.8: 25]。このため『カラム』は、インドネシアのマレーシア対決政策がマフィリンド設立により終わることを期待したのである。

おわりに

本論では、『カラム』の記事の分析を通じて、シンガポールのマレー・ムスリム知識人の視角から1960年代のマレーシアに関する政治過程を再検討した。暫定的な結論は以下の通りである。

『カラム』はシンガポールのマレー・ムスリムの立場からマレーシアをめぐる構想に積極的に発言した。マレーシア構想に賛成しつつ、その対抗上出されたマフィリンドも肯定的にとらえたことは一見矛盾するようだが、マレー・ムスリムの広域的な統合を志向する点で一貫していた。シンガポールにおいて少数派であった彼らは、さまざまな国家構想が交錯するなかで、華人、共産主義の脅威をできる限り薄め、自身を含めたマレー・ムスリムがよりよい立場を占めることができる構想を模索した。

結果的に、彼らのスタンスはマレー民族主義に近いように見える。マレーシアやマフィリンドに言及した際、彼らが強調したのはマレー人の地域という点であ

り、ボルネオやフィリピンにおける非ムスリムの存在は意識されていたとは思われない。しかし、彼らはあくまでムスリムとしての連帯という視角からマレー人の統合を支持した。これは、インドネシアへの態度から明らかになる。『カラム』はインドネシアのスカルノ政権を反イスラムとして徹底的に敵視した。彼らがマフィリンドを持ち出したのは、インドネシアでスカルノ政権が倒れたことが契機であった。彼らにとってマレー人の国家は一種の理念であり、実際に行おうとしたのはインドネシアの反政府イスラム勢力との連携であったのである。

現実的には、成立した国民国家は旧植民地の枠組みをそのまま受け継いでおり、彼らが思い描いたマレー・ムスリムの大同団結は実現されなかった。しかし、国家建設が優先的な課題となり、民族主義が優勢であった1950、60年代においても、『カラム』に代表されるムスリム知識人は多様なネットワークの構築を模索していた。これらの国家を超えたネットワークは、その後のマレーシア、インドネシア両国の「イスラム化」に向けた基盤となったといえるのではなかろうか。これらの言説をより広い社会的文脈に位置付けていくことが今後の課題となるであろう。

参考文献

- Jones, Matthew. 2002. *Conflict and Confrontation in South East Asia, 1961-1965: Britain, the United States and the Creation of Malaysia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lau, Albert. 1998. *A Moment of Anguish: Singapore in Malaysia and the Politics of Disengagement*. Singapore: Times Academic Press.
- Mackie, J.A. 1974. *Konfrontasi: The Indonesia-Malaysia Dispute, 1963-66*. London, Oxford University Press.
- Milne, R.S. and Ratnam, K.J. 1974. *Malaysia- new states in a new nation: political development of Sarawak and Sabah in Malaysia*. London: F. Cass.
- Mohamed Noordin Sopiee. 1976. *From Malayan Union to Singapore Separation: Political Unification in the Malayan Region 1945-65*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.
- Nik Anuar Nik Mahmud. 2000. *Konfrontasi Malaysia Indonesia*. Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.

- Ongkili, J.P. 1985. *Nation-building in Malaysia, 1946-1974*. Singapore: Oxford University Press.
- Poulgrain, G. 1998. *The Genesis of Konfrontasi: Malaysia Burnei Indonesia 1945-1965*. Bathurst: Crawford House Publishing.
- Roff, W. 1994 [1967]. *The Origins of Malay Nationalism (2nd edition)*. New Haven: Yale University Press.
- Rustam A.Sani. 2008. *Social Roots of the Malay Left*. Petaling Jaya: SIRD.
- 鈴木陽一 1998 「マレーシア構想の起源」『上智アジア学』16: 151-169。
- 鈴木陽一 2001 「グレーター・マレーシア1961～1967: 帝国の黄昏と東南アジア人」『国際政治』126: 132-149。
- 鈴木陽一 2015 「スルタン・オマール・アリ・サイフディン3世と新連邦構想: ブルネイのマレーシア編入問題1959-1963」『アジア・アフリカ言語文化研究』89: 47-78。
- 坪井祐司 2013 「マラヤの独立とシンガポール・ムスリム」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成』(CIAS Discussion Paper No.32)『京都大学地域研究統合情報センター、pp.21-27。
- 坪井祐司 2014a 「カラムが切り取った世界——写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40)『京都大学地域研究統合情報センター、pp.9-18。
- 坪井祐司 2014b 「宗教の制度化、民族の制度化——1950年代前半のマラヤ政治と『カラム』の戦略」『マレーシア研究』3: 29-46。
- 坪井祐司 2015 「カラムが切り取った世界Ⅱ——1950年代中葉における東南アジア・ムスリムの世界観の変化」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅵ——近代マレー・ムスリムの日常生活2』(CIAS Discussion Paper No.53)『京都大学地域研究統合情報センター、pp.17-27。
- 山本博之 2006 『脱植民地化とナショナリズム: 英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。